
「令和7年度 飼料用米多収日本一」 受賞者の取組概要

【単位収量の部】

(敬称略)

農林水産大臣賞

1 池田 侯男

農産局長賞

2 久保 徳太郎

全国農業協同組合中央会会長賞

3 黒木 嘉彦

全国農業協同組合連合会会長賞

4 坂本 正美

協同組合日本飼料工業会会長賞

5 細川 健

日本農業新聞会長賞

6 高内 良助

【地域の平均単収からの増収の部】

(敬称略)

農林水産大臣賞

7 福井 慎也 福井 順一

農産局長賞

8 株式会社 273 代表取締役 小玉 信行

全国農業協同組合中央会会長賞

9 株式会社 アグリ日辻 代表取締役 日辻 祐一

全国農業協同組合連合会会長賞

10 山内 憲次

協同組合日本飼料工業会会長賞

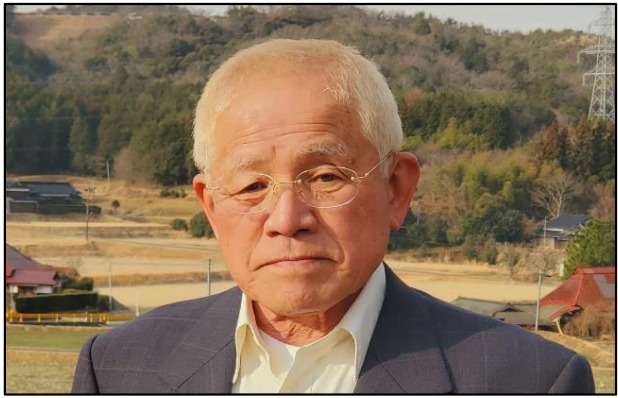
11 有限会社 エムケイ商事 代表取締役会長 黒木 守春

日本農業新聞会長賞

12 有村 幸夫

品種	作付面積	単収	地域の単収との差 (地域の平均単収)
オオナリ	1.2ha	912kg/10a	362kg/10a (550kg/10a)※

※ 作柄調整後の地域の平均単収

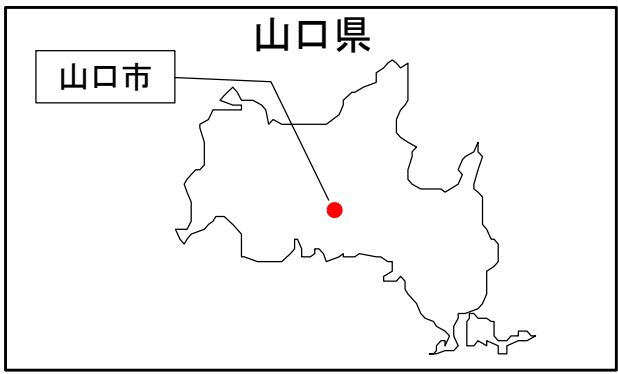


【経営概況】

- 家族経営 (本人、息子)

【作付品目】

- 主食用米 (ひとめぼれ、もち) 1.1ha
- 飼料用米 1.2ha
- かぼちゃ 0.04ha
- その他野菜 0.03ha
- 椎茸 (原木500本)



【取組のきっかけ】

- 実需者である秋川牧園 (以下「実需者」) と飼料用米生産者の耕畜連携 (資源循環型サイクル) を基本とした取組に共感するとともに、稲作作業の省力化、経営の安定化を図るため、平成29年産から飼料用米に取り組む。

【取組概要】

- プール育苗により省力化を図るとともに、50株/坪の疎植とすることで苗箱数を16枚/10a程度に抑えコスト低減を図っている。
- 土づくり期 (11月) に稲わらの早期すき込みと同時に、実需者から提供を受けた鶏ふん堆肥 (300kg/10a)、くん炭化したもみ殻 (80kg/10a) を散布するほか、牛ふん堆肥 (500kg/10a) を散布。また、基肥は、代かき前に鶏ふん堆肥 (1,000kg/10a) を散布するほか、「アシストコート中晩生048」を田植同時側条施肥することにより省力化を図っている。
- 病害虫防除は、育苗箱施用のほか、出穂前に「トップジンMゾル・トレボンエアー」 (0.8L/10a) を無人ヘリで散布。
- 雑草防除は、代かき時にトラクターに木製整地板を取り付け圃場を均平化するほか、田植後に水稻防除剤のジャンボ剤を圃場に投げ込み、その後、農薬の効果を高めるため適切な湛水管理を実施。(雑草が見受けられた場合は追加でジャンボ剤を投げ込み。)
- 乾燥・調製は、自らの所有施設で行っており、刈取りを遅らせ立毛乾燥することによりコスト低減を図っている。
- 栽培期間中、実需者主催の全生産者現地巡回視察 (年2回) を活用し、多収穫、コスト低減等の生産技術の向上を図っている。

くぼ とくたろう
2 久保 徳太郎 (愛媛県喜多郡内子町)

品種	作付面積	単収	地域の単収との差 (地域の平均単収)
北陸193号	1.7ha	818kg/10a	288kg/10a (530kg/10a)※

※ 作柄調整後の地域の平均単収

【経営概況】

- 家族経営 (本人、繁忙期：息子、弟)
- 近隣48戸の乾燥・調製作業を受託

【作付品目】

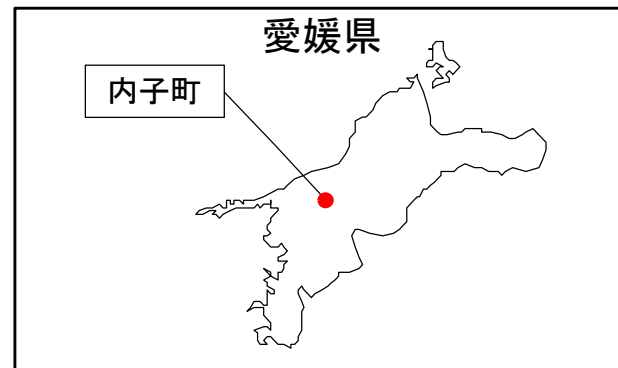
- 主食用米 (あきたこまち、ヒノヒカリ) 1.5ha
- 飼料用米 1.7ha
- 野菜 0.01ha
- その他 0.2ha

【取組のきっかけ】

- J A 愛媛たいきからの勧めがあり、平成28年産において一度飼料用米 (媛育71号) に取り組んだものの、収量が上がりず一旦取組を止めていたが、再度 J A 愛媛たいきからの勧めがあり、令和4年産から、より多収に期待ができる「北陸193号」にて取組を再開。

【取組概要】

- J A から箱施用剤散布済みの水稻苗を購入し省力化を図るとともに、50株/坪の疎植とすることで苗箱数を16枚/10a程度に抑えコスト低減を図っている。
- 収穫時にコンバインで細断した直後 (腐熟促進のため) の稲わらを全量すき込むことにより地力増進につなげている。基肥は、田植時に主食用米一発肥料「軽がる一発」 (40kg/10a) を田植同時側条施肥することにより省力化を図っている。追肥は圃場ごとの葉色を見ながら判断しており、令和7年産においては追肥を行わなかった。
- 病虫害防除は、箱施用剤散布済みの水稻苗を移植することにより省力化を図っている。
- 雑草防除は、田植後1週間以内に水田防除剤のジャンボ剤を圃場に投げ込み、その後、農薬の効果を高めるため適切な湛水管理を実施。(追加の防除は行っていない。)
- 乾燥・調製は、自らの所有施設で行っており、刈取りを遅らせ立毛乾燥することによりコスト低減を図っている。
- J A 愛媛たいき主催の飼料用米研究会に参画し生産技術の向上を図る等、J A と連携して実需者ニーズに対応できるよう努めている。



品種	作付面積	単収	地域の単収との差(地域の平均単収)
ひなたみのり	約1.4ha	797kg/10a	339kg/10a(kg/10a) ※

※作柄調整後の地域の平均単収

【経営概況】

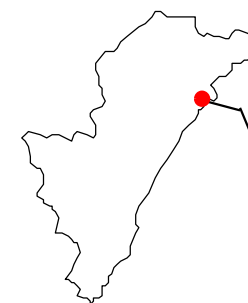
- 家族経営(本人、繁忙期:妻・息子)
- 農事組合法人ひまわりの理事を担っている

【作付品目】

- 主食用米(コシヒカリ、ヒノヒカリ、にこまる、マンゲツモチ) 3.3ha
- 飼料用米 1.4ha



宮崎県



日向市

【取組のきっかけ】

- 3年前にJAより飼料用米を紹介され、栽培開始。
- 肥料を多く散布しても倒伏しやすく多収である「ひなたみのり」を選定。

【取組概要】

- コシヒカリ→ひなたみのり→ヒノヒカリ・にこまる・マンゲツモチの順で作期分散に取り組んでいる。
- 基肥は、稲わらのすき込みに加え、「主食用米一発肥料」「オーガニック満作」の田植同時側条施肥を行っている。本年産から「オーガニック満作」の施用量を増やしており、その効果により単収の増加につながったと感じている。追肥は行っていない。
- ジャンボタニシ対策として、「スクノミン」の田植同時側条施用を行うとともに、移植後は浅水管理を徹底している。また、自家保有のドローンを活用し、「バリダシンエアー」「ビームエイトスタークル」※を散布するなど、省力的かつ効率的な病害虫防除を実施している。(※環境負荷低減の観点から地域全体で特別栽培米に取り組んでいるため、それに対応した農薬を選択。)
- 雑草防除は、移植後に「銀河ジャンボ」を投げ込み、その後は適宜リンチャー系除草剤を散布している。
- 当人が理事を務める農事組合法人ひまわり所有のライスセンターで乾燥・調製を行うほか、同法人所有農地の作業も担うなど、地域に根差した取り組みを行っている。

4 さかもと まさみ
坂本 正美(岩手県盛岡市)

品種	作付面積	単収	地域の単収との差(地域の平均単収)
つぶゆたか	1.0ha	757kg/10a	170kg/10a(587kg/10a) [※]

※作柄調整後の地域の平均単収

【経営概況】

- 家族経営(本人・妻)

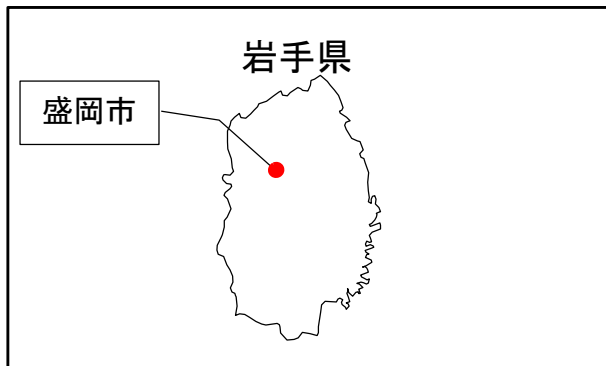
【作付品目】

- 主食用米(銀河のしずく) 1.8ha
- 飼料用米 1.0ha



【取組のきっかけ】

- 経営の安定化を図るため、多収性があり、耐倒伏性に優れる「つぶゆたか」で飼料用米生産に取り組んでいる。



【取組概要】

- 多収性があり、耐倒伏性に優れる「つぶゆたか」を選定。耐倒伏性に優れていたことから、肥料を多めに入れても栽培管理が容易であった。
- 土づくりとして、近隣の酪農家から提供された牛ふん堆肥を2t/10aですき込み、施肥管理は、基肥として化成肥料(成分N27-P10-K7)を45kg/10aで施用する。2年間にわたり牛ふん堆肥をすき込み、かつ窒素成分の高い肥料に切り替えた結果、土壌が改良され、追肥をせずとも10a当たり約150kgの単収向上を実現した。
- 雑草防除は、①初期一発剤「フルパワーMXジャンボ」、②中期剤「ウィードコアジャンボSD」を畔から投げ込む。
- 地域で生産された飼料用米を配合した飼料は、市内の養鶏会社の養鶏に給餌されており、地域循環型農業が確立されている。
- 地域の研修会に参加し、栽培技術を学び、自身の栽培に反映させている。

品種	作付面積	単収	地域の単収との差(地域の平均単収)
ゆたかまる	1.7ha	761kg/10a	148kg/10a(613kg/10a) [※]

※作柄調整後の地域の平均単収

【経営概況】

- 家族経営(本人・母)
繁忙期:臨時雇用(4名程度)

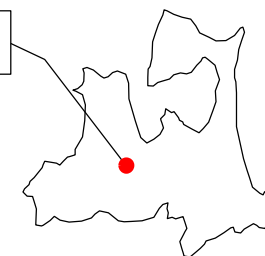
【作付品目】

- 主食用米(まっしぐら、はれわたり) 13.3ha
- 飼料用米 1.7ha



青森県

青森市



【取組のきっかけ】

- 経営の安定化に繋がることから、多収性があり、耐倒伏性に優れる「ゆたかまる」で飼料用米生産に取り組んでいる。

【取組概要】

- 多収性があり、耐倒伏性に優れる「ゆたかまる」を選定し、主食用米2品種との作期分散に取り組んでいる。
- 高密度播種育苗栽培(200~250g/箱)を実施することで、育苗箱の削減による省力化・コスト低減を図っている。
- 施肥管理は、①育苗箱に箱剤「とかすだけ」を100倍希釈して1L/箱で施用し、②基肥として一発剤(成分N21-P12-K11)を80kg/10aで施用し、③追肥として「46%輸入大粒尿素」を7kg/10aで施用する。追肥は1回のみとすることで、倒伏防止と省力化・コスト低減を図る。
- 雑草防除は、①田植えと同時に「ウルティモZ1キロ粒剤」を施用し、②背負動力散布機を用いて「シアゲMF1キロ粒剤」を施用する。また、出荷時はフレコン出荷とすることで、包装代等の削減や省力化を図る。
- 出荷先の牧場では、津軽平野で生産された飼料用米や津軽りんごの搾りかす等の食品残さを配合した飼料を養豚に給餌しており、「つがる豚」としてブランド化されるなど、地域における循環体制が確立されている。

6 たかうち りょうすけ 高内 良助(山形県東村山郡山辺町)

品種	作付面積	単収	地域の単収との差(地域の平均単収)
ふくひびき	1.3ha	785kg/10a	158kg/10a(627kg/10a) [※]

※作柄調整後の地域の平均単収

【経営概況】

- 家族経営(本人・妻・息子2名)
繁忙期:臨時雇用(2~3名)
- 良助氏は、同町で米の生産を中心に農業を展開する「(株)やまぶんファーム」の取締役社長を務めている。

【作付品目】

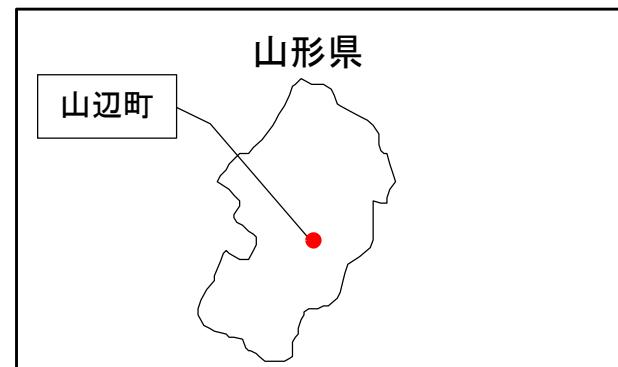
- 主食用米(つや姫、雪若丸、はえぬき、つきあかり、コシヒカリ) 14.7ha
- 飼料用米 1.3ha
- さくらんぼ 0.2ha
- 桃 0.04ha

【取組のきっかけ】

- 平成20年より山辺町が取り組む「飼料用米プロジェクト」(町内で生産された飼料用米を、町内の養豚農家に供給する)に賛同し、地域循環に貢献するため、同年より多収が期待される「ふくひびき」の栽培を開始。

【取組概要】

- 土づくりは、豚ふん堆肥をすき込む。施肥管理は、①基肥として「高度化成F444」を40kg/10aで施用し、②「高度化成F444」を13kg/10aで田植同時側条施肥し、③追肥として幼穂形成期・穂ばらみ期・穂ぞろい期の計3回、「尿素(N-46%)」を施用する。追肥は県の普及機関の指導に準じて実施し、細かな施肥管理を徹底することで多収を実現している。
- 病害虫防除は、①カメムシ防除には「エクシードフロアブル」、②いもち病防除には「ブラシンフロアブル」を各1回ホースで散布する。また、雑草防除は、①田植え時に「グリホエクス」を施用し、②除草剤散布後に生えた雑草は手で抜き取り、③畔の雑草は2~3回刈り取る。細やかな雑草管理を徹底することで倒伏が改善された。
- 作業の内容や進捗は、KSASを活用して管理することで、地図上に可視化され、法人内での作業状況の共有をスムーズに行っている。
- 町内産の飼料用米を配合した飼料は、町内の養豚場において豚に給与され、養豚は「舞米豚」としてブランド化されている。また、高内氏は、当該養豚場から豚ふん堆肥の提供を受けるとともに、県内の畜産農家へ稲わらを提供している。さらに、「飼料用米プロジェクト」で開催される報告会や勉強会にも参加することで、地域における循環体制に貢献している。



7 ふくい しんや ・ じゅんいち
福井 慎也 ・ 順一（愛媛県西予市）

品種	作付面積	単収	地域の単収との差（地域の平均単収）
北陸193号	4.1ha	847kg/10a	309kg/10a（538kg/10a）※

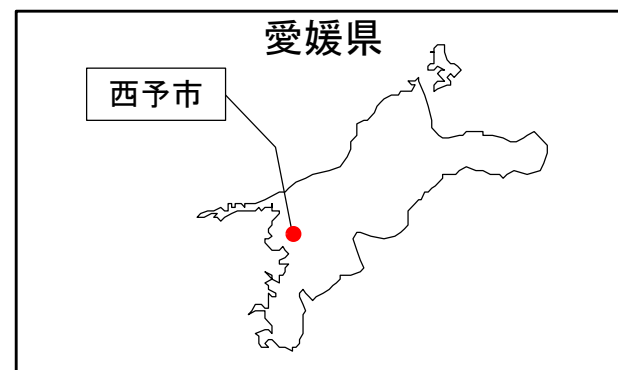
※ 作柄調整後の地域の平均単収

【経営概況】

- 家族経営（父、息子、繁忙期：アルバイトを3日程度雇用）

【作付品目】

- 主食用米（コシヒカリ、ちほみのり他）8.4ha
- 飼料用米 4.1ha
- 大豆 7.0ha
- 麦 8.0ha
- WCS用稲 3.6ha



【取組のきっかけ】

- 稲作作業の省力化、経営の安定化を図るため、平成29年産から飼料用米に取り組んでいる。
- より多収に期待できること、稲わらが多く採集できること、主食用米（コシヒカリ）との作期分散が可能であることから、令和3年産から「北陸193号」を選定。

【取組概要】

- 52株/坪の疎植とすることで苗箱数を16枚/10a程度に抑えコスト低減を図っている。
- 水稲、麦、大豆のブロックローテーション（2年3作）を実施。また、飼料用米の稲わらを西予市内の畜産農家に提供し、牛ふん堆肥の提供を受ける耕畜連携の関係を構築しており、提供を受けた牛ふん堆肥を大豆播種前に定期的に土壌に還元して土壌改善に努めている。基肥は、田植同時側条施肥により省力化を図っている。
- 病虫害防除は、育苗箱施用に加え、疎植栽培により初期生育の過繁茂を抑え風通しの良い状況を保つなど耕種的防除に取り組んでいる。また、出穂前には「ブラシンバリダゾル」、「スタークル液剤10」を無人ヘリで散布し省力化を図っている。
- 雑草防除は、田植後（2～3週間後）に、初中期フロアブル剤「ゼアス剤フロアブル」を自ら製作した水田ボート（約1m）で散布。（水田ボート：遊び感覚で楽しみながら作業ができ、1度に約60a散布可能。また、水田底の土を掻き上げるため遮光による抑草効果も期待できる）
- 乾燥・調製は、自らの所有施設で行っており、刈取りを遅らせ立毛乾燥することによりコスト低減を図っている。
- 令和4年度からクボタのドローン（T-10K）を導入したほか、KSAS（営農支援システム）を導入し省力化を図っている。

品種	作付面積	単収	地域の単収との差(地域の平均単収)
北陸193号	約4.9ha	773kg/10a	248kg/10a(kg/10a) ※

※作柄調整後の地域の平均単収

【経営概況】

- 家族経営(本人・弟・父・母)
繁忙期: アルバイト雇用(1~2名)
- 農業は「ものづくり」と考え、独学で新技術・新品種に挑戦するなど試行錯誤し、多収を実現。

【作付品目】

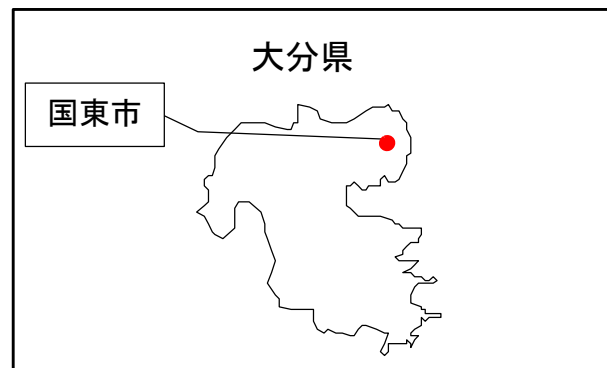
- 主食用米(にじのきらめき・なつほのか・にこまる・恋の予感・ゆうだい21・しきゆたか・ヒヨクモチ) 24ha
- 飼料用米 4.9ha
- はだか麦 28ha ○ 小麦 13ha

【取組のきっかけ】

- 主食用米価格が下落していた中、近隣の養鶏場から依頼があり、平成29年産より飼料用米の作付を開始。
- 養鶏場やインターネットから自ら情報収集を行い、より多収が期待できる「北陸193号」を選択。

【取組概要】

- ①表:主食用米/裏:はだか麦、②表:飼料用米/裏:はだか麦、③表:主食用米/裏:小麦、④表:主食用米/裏:小麦 の4体系による輪作を実施。さらに、近年は独学で再生二期作の取組を一部の圃場で開始するなど、より高収量の実現に向けて試行錯誤を重ねている。
- 飼料用米は粒が大きく栽培後期にも水を必要とすることから、ポンプを7台購入し適切な水管理を行った。
- 圃場で立毛乾燥を行った後、自己所有の機械で乾燥・調製したのちに、全量を近隣の養鶏場に持ち込んでいる。養鶏場からは鶏ふん堆肥の供給を受けるなど、耕畜連携に取り組んでいる。
- 地域農家の高齢化に伴い、作業受託を行っており、毎年2haほど経営拡大をしている。隣接するほ場を引き受けた際には、自家保有のレーザーレベラーで均平化するなどして、合筆による農地集積にも取り組んでいる。
- 可変施肥田植機、自動直進アシストトラクター、食味・水分センサー付きコンバイン、可変施肥ブロードキャスター、ドローン、マニアスプレッダ等のスマート農業技術を駆使し、省力化と生産コストの低減に取り組むことで、家族経営でありながら広い面積の管理を可能としている。



品種	作付面積	単収	地域の単収との差(地域の平均単収)
夢あおば	約4.7ha	739kg/10a	215kg/10a (kg/10a) ※

※作柄調整後の地域の平均単収

【経営概況】

- 常勤4名(本人・父・オペレーター・パート)
繁忙期: パート3名雇用
- JAつくば市の麦作部会長として生産技術の普及に努めている。

【作付品目】

- 主食用米(コシヒカリ、ほしじるし、にじのきらめき、まんげつもち) 30ha
- 飼料用米 4.7ha
- 小麦 12ha
- 大豆 10ha

【取組のきっかけ】

- 主食用米は大幅な価格変動があることから、経営安定のため飼料用米の取組を開始。
- 多収が期待でき、耐倒伏性に優れることから、令和6年産より「夢あおば」を作付け。

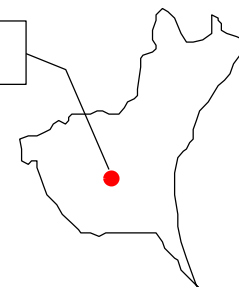
【取組概要】

- 「麦・大豆」と「水稻」の交互輪作体系を確立している。従来はコシヒカリを中心に作付けしていたが、前作の肥料分が土壤に多く残る影響で倒伏が発生していた。この課題に対応するため、飼料用米・主食用米ともに肥料要求量の高い多収品種へ切り替え、地力を有効活用することで収量の向上を実現した。さらに、一部ほ場では再生二期作にも取り組んでいる。
- 基肥として稲わらのすき込み、畜産農家より提供された豚ふん堆肥及び田植同時側条施肥を行っている。また、収量履歴や土質を踏まえて圃場を目視で確認し、必要箇所のみ無人ヘリで追肥用肥料を散布することで、省力的かつ効果的な施肥管理を実現。結果、30~60kg/10aの単収増を達成した。
- 乾燥コストの低減や作業分散の観点より、圃場で2~3週間立毛乾燥を行った後、自己所有の機械で乾燥調製を行っている。
- 年間約50aずつ地区内の農地を借り受けることで、計画的に農地の集積を進めている。



茨城県

つくば市



品種	作付面積	単収	地域の単収との差(地域の平均単収)
笑みたわわ ひなたみのり	約9.3ha	701kg/10a	257kg/10a (kg/10a) ※ <small>※作柄調整後の地域の平均単収</small>

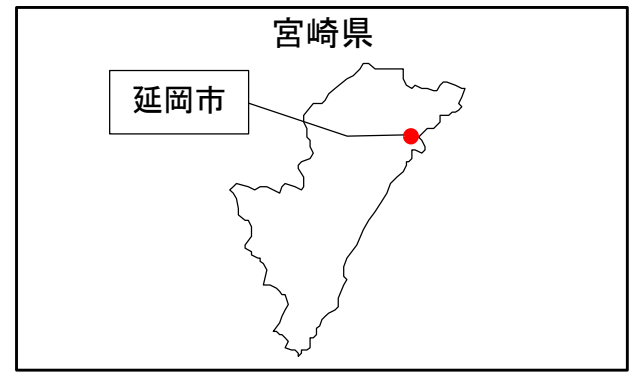


【経営概況】

- 家族経営(本人・妻・娘夫婦)
繁忙期: パート雇用
- 県から飼料用米の試験栽培や、「稲作研究会」での栽培法についての講話を委託されるなど地域で模範的な存在となっている。

【作付品目】

- 主食用米(ヒノヒカリ、クスタモチ、ひなた舞) 9.0ha
- 飼料用米 9.3ha
- たまねぎ 0.5ha



【取組のきっかけ】

- 以前はWCSを作付けしていたが、雨天が続くと圃場条件が悪くなり、契約している畜産農家の収穫作業が遅れるため、15年前より自身で収穫可能な飼料用米に切り替え。
- 大粒で多収の「笑みたわわ」と、県の奨励品種で多収の「ひなたみのり」を作付け。

【取組概要】

- 多収品種一発肥料や畜産農家から提供を受けた牛ふん堆肥の施用、育苗時に肥料を投入して茎を太らせることによるジャンボタニシの被害軽減、水管理の徹底による雑草抑制、箱施薬やドローンを活用した省力的かつ効率的な病虫害防除など、主食用米と同様の丁寧な栽培管理を行うことで多収を実現。また、環境配慮型農業を目指し、昨年より種子の温湯消毒に取り組んでいる。
- 主食用米→飼料用米→たまねぎの順で作期分散を図っている。以前はたまねぎの移植準備と稲刈りの作業が重なることがあったが、飼料用米の品種を晩生の「ミズホチカラ」から、やや晩の「笑みたわわ」に切り替えたことで、作業の競合は解消された。
- 地域農家の高齢化に伴い、作業受託や農地の引き受けを行っており、年々規模を拡大している。隣接するほ場を引き受けた際には、自ら畦畔を取り払いレーザーレベラーで均平化するなどして、大区画化を進めている。
- 圃場で立毛乾燥を行った後、自己所有の機械で乾燥・調製することで、コスト低減を図っている。
- 近隣の畜産農家に稲わらを受取提供し、畜産農家からは無償で牛ふんを散布してもらうなど、耕畜連携の体制を構築している。

11 有限会社 エムケイ商事 代表取締役会長 ^{くろき もりはる}黒木 守春(宮崎県都城市)

品種	作付面積	単収	地域の単収との差(地域の平均単収)
ひなたみのり	約10.1ha	730kg/10a	205kg/10a(kg/10a) ※

※作柄調整後の地域の平均単収

【経営概況】

- 経営主(本人)、常勤雇用(38名)
アルバイト雇用(年5名程度)
- 農業事業に加え、米穀流通事業や販売事業、養豚事業まで、幅広く手掛けている。
- 土地改良区の副理事を務める。

【作付品目】

- 主食用米(ヒノヒカリ、おてんとそだち、まいひかり、マンゲツモチ) 4.1ha
- 飼料用米 10.1ha
- 焼酎甘しょ 1.0ha
- 青刈り用麦 0.7ha
- 加工用米 8.9ha

【取組のきっかけ】

- 自社養豚農場の豚に飼料用米を給餌し、ブランド化を図りたいと考え、平成27年より飼料用米の取組を開始。
- 令和4年産より、いもち病ほ場抵抗性を有し、多収が期待される「ひなたみのり」を栽培。

【取組概要】

- 「ひなたみのり」のさらなる増収を実現するため、倒伏しにくい栽培方法を確立し、独自の栽培暦を作成するとともに、自社養豚農場と契約する耕種農家にも栽培暦を配布するなどして、「ひなたみのり」の生産拡大に努めている。
- 飼料用米の一部で乾田直播に取り組んでいる。省力化につながる一方で収量が減少するため、レーザーレベラーによる均平化で雑草を防除し発芽率を改善したり、追肥によって収量を増加させるなどの工夫を行っている。また、九州沖縄農業研究センター主催の乾田直播研修会にも参加するなど、最適な栽培管理方法を模索している。
- 自社養豚農場との耕畜連携に加え、近隣の畜産農家への稲わらの無償譲渡や耕種農家への豚ふんの無償提供など、耕種と畜産の垣根を超えた取り組みを行っている。また、収穫された飼料用米は「エムケイさんちのお米豚」や「都城農業高校のお米豚」など畜産物のブランド化に貢献している。
- 担い手のいない農地を毎年約2haずつ受託し、自社保有のレーザーレベラーやユンボを活用して合筆を行っている。さらに、稲作や刈り入れ、もみすりなどの業務受託や水路の維持管理、草刈りなどを通じて、地域の多面的機能の維持に貢献している。



品種	作付面積	単収	地域の単収との差(地域の平均単収)
ひなたみのり	約2.5ha	801kg/10a	276kg/10a(kg/10a) ※

※作柄調整後の地域の平均単収

【経営概況】

- 経営主(本人) 1名
- 就農して10年、栽培が上手い人を真似、丁寧に仕事をするなど地道な努力で多収を実現。

【作付品目】

- 主食用米(おてんとそだち、ヒノヒカリ) 1.4ha
- 飼料用米 2.5ha
- WSC用稲 1.0ha
- イタリアンライグラス 2.7ha

【取組のきっかけ】

- 10年前に親から引継ぎ、「ミズホチカラ」の作付を開始。
- 3年前より、茎数が多く粒が大きいいため収量が多く、カメムシにも強い「ひなたみのり」を栽培。品種転換により収量は2割増と効果が出ている。

【取組概要】

- 主食用米、飼料用米、WSC用稲、裏作のイタリアンライグラスで作期を分散させることで、作業効率の向上を図っている。
- 自ら飼育する牛の敷材に稲わらを使用する他、裏作のイタリアンライグラスの自家給餌を行っている。また、近隣の畜産農家から堆肥の提供を受けるなど、耕畜連携の体制を構築している。
- 環境負荷を軽減するため、稲わらのすき込みや牛ふん堆肥の活用により化学肥料使用量の削減を図っている(令和7年産では前年産より10kg/10a程度削減)。
- 昨年までは6条の側条施肥田植機を使用していたが、本年からは新たに8条の側条施肥田植機を導入するとともに、無人ヘリを活用した病害虫防除を行うなど、省力化に取り組んでいる。
- 圃場で立毛乾燥を行った後、自己所有の機械で乾燥・調製することで、適期収穫とコスト低減を図っている。

